

芥川龍之介「犬と笛」論

吉田 祐紀乃

はじめに

「犬と笛」は、一九一九（大正八）年一月一日および一月一五日発行の『赤い鳥』第二巻第一・二号に発表された。第一号には本文の第一節から第三節までが、第二号には第四節以下が掲載されている。生前の単行本には収められず、没後に刊行された芥川唯一の童話集『三つの宝』（一九二八年六月 改造社）にも収録されなかった。

先行研究では、説話的な話型や物語の構成要素について主に論じられてきた^①。また、『三つの宝』に収録された作品と比較し、「勸善懲惡型」である「犬と笛」の異質性を指摘した論など^②はあるが、本作を単体で論じたものは少ない。先行研究全体として、物語の型・外枠を捉える研究が盛んであり、物語内で何がどのように書かれているかという本文の分析が不十分な印象を受ける。そこで、本論の第一節では、髪長彦の人物設定に着目し、その描写や叙述が作品内でどのように変化していくかを読み取る。第二節で

は、先行研究で指摘された物語の構成要素（試練の場面^③）と、髪長彦の人物設定の変化との関係性を考察する。なお、「犬と笛」本文の引用は、『芥川龍之介全集』第二巻（一九二八年一月三〇日 岩波書店）に拠り、ルビは省略した。芥川の死後間もなく、生前彼に近かった友人らの編集により刊行された同全集では、今日では現物を確認できない原稿や芥川書き入れ稿に基づいたと思しい本文が収録されており、本作でも初出形と異なる部分が見られる。

一．女のやうな木樵

髪長彦の人物設定について、本文の第一段落では①「若い木樵」であるという身分の設定 ②「女のやう」であるという外見の設定の二つの情報が示されている。

昔、大和の國葛城山の麓に、髪長彦といふ若い木樵が住んでゐました。これは顔かたちが女のやうにやさ

しくつて、その上髪までも女のやうに長かつたもの
すから、かういふ名前をつけられてゐたのです。

本文冒頭では、「髮長彦」という名前の由来として、「顔
かたが女のやうにやさし」いことと、「髪までも女のや
うに長」いことの二点が挙げられている。髪が長いため「髮
長」の名がつけられたことは、容易に納得できる。しかし、
「顔かたが女のやうにやさし」という理由は、「髮長」
の名に直接結びつくものだろうか。わずか一文のうちに、
「女のやうに」という表現が二回も使われているのは印象
的だ。また、この名前は「つけられ」たものであることから、
他者の評価が反映されていると考えられる。以上のことを
踏まえると、髮長彦はその外見的特徴により、「女のやう」
という評価を受け、〈女性性〉を強調された人物であると
言える。

本文中で髮長彦の〈女性性〉が描かれる場面としては、
以下の二箇所が挙げられる。

かう云つて二人の侍は、女のやうな木樵と三匹の犬
とをさも莫迦にしたやうに見下しながら、途を急いで
行つてしまひました。(第二節)

いきなりその御姫様たちが、女のやうな木樵と一しよ
に、逞しい黒犬に跨つて、空から舞ひ下つて来たので
すから、その驚きと云つたらありません。(第五節)

これらは全て「二人の年若な侍」が出てくる場面の叙述
だ。髮長彦の〈女性性〉は、「弓矢に身をかためた」侍た
ちに格下扱ひされる要因として機能していると言える。ま
た、侍たちに一貫して敬語を使い、丁寧な言葉で話す髮長
彦に対し、侍たちは高圧的な態度で接している。会話の様
子から、侍たちにとって髮長彦は「卑しい木樵」であるとい
う、身分的な上下関係を読み取ることができるといえる。
最初に「逞しい馬に跨つて」登場した侍たちは、やがて「莫
迦にし」ていた「女のやうな木樵」が「逞しい黒犬に跨つ
て」現れるのを目の当たりにするのだ。

ここで、本文の第一文である「昔、大和の國葛城山の麓
に、髮長彦といふ若い木樵が住んでゐました。」において、
初出形との間に異同が見られることに注目したい。『赤い
鳥』掲載時には単に「木樵」と説明されていた部分が、第
一回全集である『芥川龍之介全集』第二巻(前掲)では「若
い木樵」に改められている。これは作者の意図を反映した
書き換えだと考えられる。この書き換えによって、「二人
の年若な侍」と「若い木樵」はほぼ同年代だと推測するこ

とができるようになり、「御姫様」を巡る両者の対立関係・対比の構造がより明確になるのではないか。

両者の対比の構造は、以下の表現からも読み取ることができる。

その途中で二人の御姫様は、どう御思ひになつたのか、御自分たちの金の櫛と銀の櫛とをぬきとつて、それを髪長彦の長い髪へそつとさして御置きになりました。が、こつちは（論者注…髪長彦は）元よりそんな事には、氣がつく筈がありません。唯、一生懸命に黒犬を急がせながら、美しい大和の國原を足の下に見下して、ずんずん空を飛んで行きました。（第五節）

こつちは二人の侍です。折角方方探しまはつたのに、御姫様たちの御行方がどうしても知れないので、しをしを馬を進めてゐると（同）

「こつちは」という表現は、本文全体の中でこの二箇所以外では使われていない。あえて「こつちは」という同じ指示語を使うことで、御姫様を手に入れた髪長彦／手に入られなかった侍たちが対比されている。更に、「ずんずん」「しをしを」という擬態語によって、両者の対照的な様子

が印象付けられている。

続いて、髪長彦自身の言動について見ていく。この物語は三人称の語りによって進行していき、髪長彦が主語の文章では、「髪長彦」「木樵」の二種類の呼称が使われている。「木樵」を主語として使用する例は、「そこで木樵は、暫く考へてゐましたが」（第一節）と「そこで木樵はすぐに白犬と斑犬とを、兩方の側にかかへた儘」（第二節）の二箇所である。第二節の末尾において、生駒山にいる食蟹人の所へ飛んで行つた後は、前述した侍たちとの場面を除いて、「木樵」という呼称は使われなくなる。

食蟹人や土蜘蛛との戦いの場面では、髪長彦の男性的な言動が描写されている。生駒山に着いた髪長彦は、「勇ましい聲で」斑犬に指示を出し、食蟹人を退治する。土蜘蛛との戦いの際には、

「いや、いや、己はお前がさらつて来た御姫様をとり返しにやつて来たのだ。早く御姫様を返せばよし、さもなければあの食蟹人同様、殺してしまふからさう思へ。」と、恐しい勢で叱りつけました。（第四節）

とあるように、「己」という男性的な一人称を用い、「恐し

い勢で叱りつけ」ている。結論を先取りして言えば、以下「女のやうな木樵」だった髪長彦は、戦いや手柄を奪われるという挫折を経験し、最終的には「立派な大将の装ひ」の〈男〉に変貌を遂げるのだ。

また、第一節で髪長彦に対して使われていた「やさし」という言葉は、第二節以降の髪長彦の描写では見られなくなる。その一方で、生駒山の駒姫と笠置山の笠姫の「やさしい」声や囁きは、何度も描かれていた。髪長彦の〈女性性〉＝「やさし」さは、山の姫たちへと移っていき、髪長彦は「やさし」さの代わりに「凜凜し」さを獲得するのである。

本文冒頭において〈女性性〉を強調されていた髪長彦が、〈男性〉に変わっていくことは、本文の結末部分の表現からも裏付けられる。

そこでまん中に立つた大臣様は、どちらの云ふ事がほんとうとも、見きはめが御つきにならないので、侍たちと髪長彦を御見比べなさりながら、

「これはお前たちに聞いて見るより外はない。一體お前たちを助けたのは、どつちの男だつたと思ふ。」と、御姫様たちの方を向いて、仰有いました。

すると二人の御姫様は、一度に御父様の胸に御すが

りになりながら、

「私たちを助けたしたのは、髪長彦でございます。その證據には、あの男のふさふさした長い髪に、私たちの櫛をさして置きましたから、どうかそれを御覽下さいまし。」と、恥しさに御云ひになりました。

大臣様の言う「男」は侍たちも含めた表現であるが、御姫様の言う「男」は髪長彦一人のみに向けられた表現だ。ここで御姫様の言う「あの男の」という表現は、『赤い鳥』収録時の「あの人の」からの変更が見られる。

勿論、大臣様の「男」という発言に合わせて、御姫様の発言を「男」に変えたと考えることもできる。しかし、御姫様が「恥しさに」発言していることや、「御姫様を探し出して来たものには、厚い御褒美を下さると云ふ仰せ」でありながら「澤山御褒美を頂いた」だけでなく「飛鳥の大臣様の御婿様にな」ったことを踏まえると、御姫様たちが髪長彦を恋愛対象としての「男」と捉えていると言えるのではないか。

以上により、「犬と笛」という物語は、髪長彦が「木樵」から「飛鳥の大臣様の御婿様」に出世するという身分上の変化と、〈女性〉から〈男性〉へ変化するという二つの変化を描いた作品だと結論付けた。髪が長いという髪長彦の

人物設定は、御姫様救出を証明する（櫛をさす）ためだけの機能ではない。作品本文の第一段落で示された、髪長彦の（低い身分）と（女性性）という人物設定は、物語の結末では覆されるのである。

二、二回の試練

関口安義は『芥川龍之介と児童文学』第Ⅱ部第二章「犬と笛」（二〇〇〇年一月三十一日 久山社）において、芥川の児童文学作品の多くは、起承転結の四部構成から成ると指摘している。関口は「犬と笛」について、第一節を「起」、第二節〜第四節を「承」、第五節を「転」、第六節を「結」とし、「転」では「順調だった髪長彦の運命に試練が訪れる」と分析した。

確かに、「転」に当たる第五節では、髪長彦は侍たちに手柄を奪われそうになるといって試練に直面する。但し、本作における試練の描写は第五節だけではない。第四節においても、髪長彦は土蜘蛛の計略にはまり、窮地に追い込まれている。本節では、まず、二回描かれる「試練」が作中どのように意味付けられるかを考える。次に、（女性）から（男性）への変化という観点と、「試練」を合わせた考察を試みる。

まず、一度目の試練（第四節）について検討する。この

試練は、服従したふりをする土蜘蛛の演技に髪長彦が騙されたことに起因する。土蜘蛛によって洞穴に閉じ込められた髪長彦は、腰にさしていた笛のことを思い出す。

この笛を吹きさへすれば、鳥獣は云ふまでもなく、草木もうつとり聞き惚れるのですから、あの狡猾な土蜘蛛でも、心を動かさないとはいりません。そこで髪長彦は勇氣をとり直して、吠えたける犬をなだめながら、一心不乱に笛を吹き出しました。

この場面では、髪長彦が後天的に得た犬の力を使わず、自身の笛の力⁸で試練に立ち向かおうとする。第一節から笛を吹く場面は度々描かれているが、髪長彦が明確な意図・笛の音色で土蜘蛛の心を動かすこと（を持つて笛を吹くのは、この場面が初めてである）。

第一節において髪長彦は「いつもの通り」「餘念もなく」、「獨りでその音を樂し」むために笛を吹いていた。足一つの神から笛の演奏の礼として白犬を貰った後も、あくる日には「何気なく笛を鳴らしてゐる」。「お前は中中笛がうまい」と神からの称賛を受けたにも関わらず、笛の才能を自覚している様子は描かれない。髪長彦にとっての笛は、あくまで自分「獨り」のための娯楽であった。

それに対し、先の引用部（第四節）では、自分の笛の演奏が他者に働きかける力（自分の才能）を自覚し、その力を意図的に利用しようとしている。第四節における一度目の試練は、髪長彦が先天的な笛の能力を自覚し、自らの才で道を切り開く場面として意味付けられる。

次に、二度目の試練（第五節）について検討する。御姫様を無事に救出した髪長彦は、己の慢心が原因で、侍たちに笛を奪われてしまう。一度目の試練を通し、自分の笛の演奏には、敵の心までも動かす力があると確信したことで、「自分の大手柄」という自惚れに繋がったのではないか。一度目の試練は、二度目の試練を誘発するものとして機能していると考えられる。なお、第四節で土蜘蛛の演技に騙され「口惜しが」った髪長彦は、第五節では「上邊はさも嬉しさうに」髪長彦を褒める侍たちの演技に騙されており、同じ過ちを繰り返している。

二度目の試練での髪長彦の様子は、「唯悲しさうにおいおい泣いてをりました」と描写される。「おいおい」「しくしく」という程度・叙述の差はあるものの、先の第四節において、土蜘蛛に捕らわれた御姫様の御姫様の様子を描写した「可愛らしい御姫様が、悲しさうにしくしく泣いてるます」と類似した表現だと言える。御姫様を（救出する立

場）だった髪長彦は、笛を失ったことにより、御姫様と同じ（助けを求める立場）へと転倒しているのである。

また、作中で「さうに」という言葉で髪長彦の心情が語られるのは、この場面のみである。第二節では「髪長彦は好い事を聞いたと思ひました」、第五節では「ふと自分の大手柄を、この二人の侍たちにも聞かせたいと云ふ心もちが起つて来たものですから」とあるように、作品全体を通して、髪長彦の心情は直接的に語られてきた。それに対し「悲しさうに」という表現は、髪長彦の様子を外部から観察したものであり、他の場面と比べ髪長彦から距離をとった語りとなっている。

遂方に暮れる髪長彦の前に、生駒山の駒姫と笠置山の笠姫が現れ、笛を取り返してくれる。¹⁰山の姫たちは、大臣様の御姫様の救出に際し、髪長彦によって二次的に助けられていた。山の姫たちの「少しも御心配なさいますな」という言葉は、髪長彦が御姉様の御姫様にかけた「もう御心配には及びません」という言葉を思わせる。ここでは、髪長彦が（助けを求める立場）へと転倒した一方で、山の姫たちが（救出する立場）へと成り代わっていると見える。第五節における二度目の試練は、（救出する立場）と（助けを求める立場）が逆転する場面として意味付けられる。

ここから、（女性）から（男性）への変化という観点と、「試

練」を合わせた考察を行っていく。本論の第一節では、〈女性性〉を強調されていた髪長彦が、戦いの中で男性的な言動をとっていることや、御姫様から「男」として扱われていることを根拠に、「立派な大将の装ひ」の〈男〉に変貌を遂げると考察した。

二度目の試練が描かれたことにより、〈男性〉への過渡期にある髪長彦が、笛がなければ無力であることが露呈している。髪長彦が最終的に「立派な大将の装ひ」となる、即ち〈男〉となるのは、笛を再び手にした後だ。髪長彦は笛がなければ、御姫様や試練に直面した自分を〈救出する立場〉にもなれず、〈男性〉への変貌を果たすこともできないのである。

おわりに

本論では、髪長彦の人物設定に着目し、作中における髪長彦の二つの変化を明らかにした。「女のやうな木樵」であった髪長彦は、最終的には「立派な大将の装ひ」の〈男〉へと変化し、「飛鳥の大臣様の御婿様」へと出世している。また、二回の試練の場面を分析することで、髪長彦が〈救出する立場〉の〈男〉となるためには笛が不可欠であることが読み取れた。第一節で示された髪長彦の三つの人物設定(①若い木樵という身分 ②女のような外見 ③笛の名

手)のうち、身分と外見の設定は結末部で覆されるが、笛の名手という設定だけは一貫して保たれている。だからこそ本作のタイトルは、「犬と笛」なのである。

(1) 古くは、島内景二「昔話と童話の話型的研究——芥川龍之介の作品を中心として」(『電気通信大学紀要』三巻二号 一九九〇年二月)ここでは、関口安義編「芥川龍之介作品論集成」第五卷(一九九九年七月二八日 翰林書房)に収録のものを参照)によって、「低い身分から出発した若者の成り上りを語る多くの文学作品と共通するものがある」とされ、「伝統的な発想の形式」話型の影響の強さが指摘された。熊谷信子「芥川龍之介『犬と笛』論——話型形成からの物語——」(『芸術至上主義文芸』二二号 一九九五年二月)では、「禁止事項」〈鬼神退治〉(報恩譚)〈致富譚〉(難題智譚)の五つの話型の組み合わせで、物語が構成されているとする。近年では、深津謙一郎が「『赤い鳥』の芥川」(『文学藝術』四二号 二〇一九年二月)において、「未熟な存在」(超越者)〈試練〉の三要素から分析を行い、芥川の「赤い鳥」掲載作品の傾向を探った。

(2) 足立直子は「童話集『三つの宝』研究——その編集方針と芥川童話の方向性——」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』二六号 二〇二三年三月)において、「三つの宝」に収録された作品の共通性を探り、収録されなかった「犬と笛」の異質性

を検証した。足立は『三つの宝』の収録作品の共通性として、「成功譚を成り立たせる魔法の品などは存在しない」こと、「完全な悪など存在しない」ことを挙げ、「犬と笛」は「典型的な勧善懲悪型のストーリー」であるために、『三つの宝』には収録されなかったとした。

(3) 試練について言及した論として、関口安義『芥川龍之介と児童文学』第Ⅱ部第二章「犬と笛」(二〇〇〇年一月三十一日久山社)と、深津謙一郎の注1前掲論などがある。起承転結の四部構成を前提に本作を分析した関口は、「起」に当たる第一節には「葛城山の妖怪」、「承」に当たる第二節「第四節には「髪長彦の姫君救出」、「転」に当たる第五節には「髪長彦の試練」、「結」に当たる第六節には「貴種流離」という章題をつけて論じている。また、深津は、髪長彦が鬼神にさらわれた御姫様を取り戻し、「厚い御褒美」を貰えるかどうかが本作の〈試練〉であるとする。

(4) 島内景二は注1前掲論において、「心のやさしさと汚なさが、それぞれの発する言葉によって明らかになる」と論じている。また、熊谷信子は注1前掲論で、両者の対照的な態度が〈善〉と〈悪〉の対比となり、第五・六節で如実にあらわれてくるとする。

(5) 「犬と笛」は、第一回全集である『芥川龍之介全集』第二卷(一九二八年一月三〇日 岩波書店)収録に際し、初出誌『赤

い鳥』との異同が生じている。関口安義は『芥川龍之介と児童文学』第Ⅱ部第二章「犬と笛」(注3前掲)において、『赤い鳥』発表時には鈴木三重吉の添削が加わったと推測し、異同が生じた理由を「第一回全集編集時に龍之介の原稿が発見され、それによって本文を原稿に戻したものとと思う」と述べている。本論では関口の見解に則り、初出時からの異同を、芥川原稿に基づいたものとして扱う。

(6) 熊谷信子は注1前掲論において、「髪長彦の姿が木樵から大将へと変わっていく語りには、主人公の変身を意図していることが読みとれる。なぜなら、髪長彦の容姿の変化は、そのまま木樵から武士へと社会的身分が移行したことを告げているからである。この移行はその後、髪長彦が飛鳥の大臣様の婿としてむかえられる伏線と考えられる」と論じている。

(7) 第六節に「いや、大臣様でさへ、あまりの不思議に御驚きになつて、暫くはまるで夢のやうに、髪長彦の凜凜しい姿を、ほんやり眺めていらつしやいました」とある。

(8) 熊谷信子は注1前掲論で、髪長彦の笛の音には芸術の絶対的な力が存在していると述べている。

(9) 第三節に「綺麗な御姫様が一人、しくしく泣いていらつしやいました」とある。これは、食蟻人に捕らわれた御姉様の御姫様の様子を描写したものである。「悲しさうに」とは書かれ

ていないが、泣いている点や、一人では難局を打開することができない無力な存在であるという点において、土蜘蛛に捕らわれた御妹様の御姫様の様子（第四節）や、二度目の試練での髪長彦の様子（第五節）と類似性がみられる。

（10）島内景二は注1前掲論で、山の姫たちの報恩は「相互救済」の形で実現しているとする。また、古典文学で愛好される「女性の援助による男性の幸福の獲得」という趣向だと指摘している。